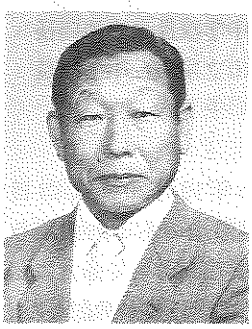
栃木県中学校長会報



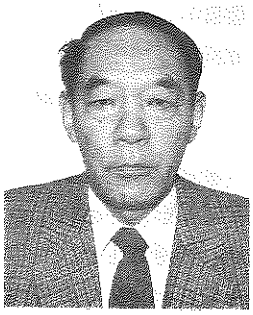
常識の再点検

県中学校長会副会長
真岡市立真岡中学校
軽部　亨

常識とはウソ偽りがないから常識であるが、あえて「常識のウソ」が語られている。「お魚のコゲは癌のもと」は常識だったが、この神話も崩壊した。さらに昔のこと、「ミョウガを食べると馬鹿になる」は常識であった。ミョウガを摘んでくると、決まって玉子とじだった。なんともいえない香りに誘われて、おかわりをすると「ミョウガは馬鹿になる」とからかわれた。この香りが脳を悪くすると、呼吸をせずに一気に汁を飲み干したり、周囲の玉子だけを吸ったりした。

私は30才を過ぎて、それがウソだと知った。

ある朝、ＴＶの「宗教の時間」を何気なく観ていた。釈迦の弟子にたいそう頭の悪い人がいて、時に自分の名前も忘れる程だった。釈迦が「三業に悪を作らず」と、三つの教えを暗記させた。弟子は野原で大声で唱えたので、近所の童はすぐに憶えてしまったのに、弟子はついに暗記することができなかった。弟子は釈迦に「私はどうしてこのように愚かなのでしょうか。私はみ仏の弟子にはなれませぬ」と訴えた。釈迦は静かに「愚者とは自分が愚かであることを知らないものです。お前のように自分が愚かであることを知っている者は愚かではありません」と諭し、箒を渡されて、「塵を払い、垢を除かん」と教えた。弟子は毎日ひたすらに清掃し体を清めて、仏前にこの句を唱え、やがて悟りを開き、高僧として入寂した。ミョウガはこの僧の墓に生えた草で、以後、ミョウガと愚者が結びついて伝えられてきた、とか。協力し点検し、常識豊かな校長会に育てたい。



猪年を迎えて

栃木県中学校長会副会長
小山市立小山城南中学校
石川光男

年末からの心痛む児童・生徒の「いじめ問題」。それにともなっての自殺事件や地震がつづくなかで平成７年、猪年を迎えました。

なんとなく暗い気持ちで第３学期始業式の式辞を考えていた時、ふと、年末の卒業生２人のことが頭に浮かんできました。

Ａ男は現在高校３年生。休み中郵便配達のアルバイトに精を出し、配達で学校に来ました。

明るい笑顔で、「先生就職も決まりました。社会人になっても、ぼくの自慢できることを続けていきますから見ていて下さい。」と言って、元気よく手を振り、自転車を走らせていきました。

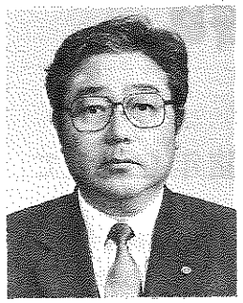
Ａ男の自慢は小学校から現在までの12年間無遅刻・無欠席・無早退というすばらしいものです。

また、Ｂ子は中学校在学中、成績は常に上位で部活動にも熱心に取り組んでおりました。

高校に入って都大路を走りたいという希望とその後の生き方についても自分なりの考えをきちんと持ち、卒業式の前日まで学習と部活動を両立させておりました。

高校に入ってからも両立に努め、見事、県代表校の一員として、昨年末都大路を走り、今も高校最後の年をもと練習に励んでいることと思います。

始業式の式辞の中で、「猪は己の行動範囲をよく知り、十分周囲のことを見極めてから目的に向って突き進む動物です。みなさんも一人一人自分の良さをよく知り、きちんと目的を持って進む足がかりになる年にしましょう。」と２人のことを例に出して話したことは言うまでもありません。



「変化への対応」について

副会長
宇都宮市立旭中学校
金子隆郎

先輩諸兄をさしおいて、計らずも副会長を命ぜられましたが、その責任を十分に果たせないことを恐縮しております。

それにしても、教育関係はもとより多くの分野から会議や審議会等の構成員として会長をはじめ本会の代表に対する出席要請が多く、まさに、中学校教育を担う者の代表として、本会に対する期待や要望がいかに大きく幅広いものであるかを改めて感じています。また、それらに出席するたびに、校長として中学校教育に関する現状と将来展望あるいは理念といったものを常に問われているわけで、自己啓発の必要性を痛感しています。

いま、新しい教育感に基づく教育の実践が行われているわけですが、「変化への対応」がのキーワードとなっています。第二次大戦後、教育課程の基準の改善がなされるたびにそのキーワードが用いられてきました。「系統性の重視」「調和と統一」「ゆとりと充実」といったものがその例ですが、社会の変化とその時代の教育の考え方との間に大きなずれが目立つたびに改訂が行われてきたということができると思います。

今回の「変化への対応」についても、それをそのままに受けとれば、世の中の急激な変化にも的確に対応できるような柔軟で豊かな判断力や思考力が旺盛な学習意欲ということになるのでしょうが、なにかそれだけですと世の中の変化が先にあってそれに教育が対応するというような意味にも受とれて、何かもの足りないような気がします。

世の中の変化をもたらす主体はいうまでもなく人そのものなのですから、そういった人を育てる教育は、変化の主体となる人間を育てることがこのキーワードの真の意味だと考えたいものです。

第45回全日本中学校長会

研究協議会徳島大会に参加して

栃木県中学校長会事務局長
宇都宮市立泉が丘中学校長
千本文雄

第45回全日中大会が平成6年10月20日(木)、21日(金)の両日にわたり、2,200名参加のもと阿波踊りと鳴門の渦潮の国、四国徳島市において盛大に開催され、本県からも41名の中学校長が参加した。

今年度で完結する「心豊かでたくましい日本人を育てる中学校教育」の大会主題に基づき、全体協議会では、新しい時代に対応する学力の育成、21世紀を主体的に生きる生徒の育成を図る学校経営の提案がなされた。

分科会では、それぞれの協議題に基づき、各地区より2名が提案をし、当面する課題について8分科会ともに白熱の協議がなされた。

文部省説明では、①学校週5日制に関しての今後の見通し（月2回は現行学習指導要領で実施）②「児童の権利に関する条約」への学校の対応（基本的人権の尊重の立場は従来から一貫しており今後も変わらない）、③登校拒否等の学校不適応生徒の増大への対応（適応教室を増やしていきたい）、④高校入学者選抜の改善と進路指導について（自ら学ぶ意欲、思考力、判断力等を重視してスポーツ活動、ボランティア活動等をとりあげる。進路指導主事の枠外配置はしない）、⑤教員採用の改善と初任者研修の充実（優れた資質、能力を備えた人材の採用、初任者研修は定着したので、平成7年度から、教職10、20年目研修を充実する意味でコンピュータ基礎を研修内容に入れたい）等の説明があった。

記念講演では、特命全権大使（日韓国交正常化交渉日本政府代表）の遠藤哲也先生から「激動する国際情勢と日本の役割」を演題として、アジアと日本との関係を中心にしての講演があった。

今年はテーマ完結の年度にふさわしい充実した大会であった。徳島県中学校長会に感謝したい。

研究学校発表概要

「男女の特性を理解し、相互敬愛の精神を高め、望ましい人間関係を育てる」

下都賀郡藤岡町立藤岡第一中学校
植竹敏明

1　研究の実際

(1)　授業研究部の取り組み

保健、道徳、学級活動の関連指導計画を作成し、指導の効果を図った。

①　保健体育科

生徒のニーズ等の実態把握をし、授業の構築をした。また、内容により養護教諭の専門性を生かし、T・T方式の授業を実施した。「性交」「エイズ」の指導を検討し、年間指導計画を作成した。

②　道徳

道徳の授業時間だけでなく事後指導に、また、資料の改作や自作資料、VTR資料の開発に力を入れた。効果を上げるため、指導内容に関連させ、家庭と連携を図った。

③　学級活動

「男女の人間関係」「社会的側面」に重点を置き指導計画を作成した。また、生徒が接する性情報を把握し、生徒の本音が出る授業の構築に力を入れた。

(2)　調査・啓発部の取り組み

①　調査活動

生徒対象の性に関する意識・実態調査、保護者対象の性に関する意識調査。小学校3校の性に関する指導計画調査を行い、研究推進の基礎資料とした。

②　啓発活動

・生徒と保護者の啓発

「保健だより」「藤一だより」により、学校での取り組みの様子や指導内容の啓発を行った。「家庭教育学級」では、家庭での性教育をグループごとにフリートークをし、「PTA研修会」では保健の模擬授業を行った。生徒には、性に関する図書を購入し、自由に閲覧できるよう図書室の工夫をした。学校祭では、「エイズ」「二次性徴」等、生徒の自主的展示活動が見られ、高い評価を得た。

・職員の啓発

教師の性に関する考え方、受けとめ方の違いを職員研修で共通理解を図った。職員用啓発資料発行や各研修会に参加により職員一人一人の質的向上を図った。

2　研究の成果と今後の課題

(1)　研究の成果

〈研究推進について〉

①　全体研修等により積極的な研究の取り組みが出た。

②　性に関する指導内容を関連させ、授業実践を重ねた結果、授業に自信を持って取り組めるようになってきた。

③　生徒の実態にあった指導過程を工夫・改善し、授業の質的転換が図られてきた。

④　教師と生徒の性に関するコミュニケーションがスムーズになり生徒理解が深まった。

⑤　各行事計画時から、男女の特性を踏まえ配慮できるようになってきた。

〈生徒の変容について〉

①　不安や悩みを表す生徒が多くなった。

②　自分の二次性徴と男女の性差をとらえることができるようになってきた。

③　生徒主体の諸活動の結果、男女の協力など、自主性と連帯感が高まってきた。

④　教師に対して恥ずかしがらずに話ができるようになってきた。

(2)　今後の課題

①　指導内容、指導方法、資料の開発等、生徒の実態に合わせての実践研究。

②　小・中学校のより密接な連携。

③　生徒がもっと悩み等を打ち明けてくるような信頼関係を築くこと。

④　「心」を育てる指導の充実。

⑤　保護者の実態に応じた効果的な啓発。

自ら考え、いきいきと活動する生徒の育成

宇都宮市立鬼怒中学校
校長　塩　澤　陽　一

1　研究のねらい

本校が新しい教育観・指導観に立った真の教育活動を展開していくためには、あらゆる領域・内容に関わって機能する生徒指導のあり方を追求していくことこそ、最も効果的にその成果を期待しうるものと考えた。

明るく素直だが主体性に欠け、また新興地域が多くを占め郷土意識が希薄で、地域での存在観に乏しい等の生徒の実態に基づき、標記のテーマを掲げ、ねらいを次のように設定した。

(1)　いきいきと学習に取り組む生徒の育成
(2)　自ら計画し、自分を生かしていきいきと活動できる生徒の育成
(3)　地域社会の中で、自己を生かしていきいきと活動できる生徒の育成

2　研究実践の主な内容

(1)　学習指導における取り組み

学習指導においては、特に伸ばしたい資質を「判断力」「実践力」「意欲」とおさえ、これらの力を育てるための授業での取り組みの重点を

ア　学習意欲を引出し、持続させ、高めるための助言や援助の工夫
イ　学習過程での生徒一人一人の特性の把握とそれを生かした個への対応の工夫

をすることで目標にせまるよう努めた。

(2)　諸活動における取り組み

生徒の活動については「いままでのことをやればよい」からの脱却を図り、また教師主導型の運営を避けて、生徒の自発的・自治的活動を求めていった。そのために、あらゆる方法により生徒理解に努めながら、認め、励まし、言葉掛けをして活動への意欲を喚起するとともに、諸活動を見直しながら生徒の主体的活動の場の拡大を図った。展開され、効果をあげた主な内容は

・校則の見直し
・生徒会及び各委員会の組織と活動内容の見直し
・学級の日や帰りの会の見直し
・体験活動の拡大（奉仕活動・職場体験学習等）

このほか各行事においても、企画運営をまかせ、生徒の創意工夫を生かすとともに、生徒一人一人が責任をもって活動し、成就感を味わい得る実践のあり方を探ってきた。

(3)　地域連携への取り組み

地域教育力の活用を目指し、前述の学習指導及び諸活動に連動して一体的な実践が図れるよう、地域連携の推進と地域における活動の場の開発に努めた。

具体的には、地区懇談会を定期的に開催し連携の要とした。これは保護者、生徒の代表、職員と、さらにテーマに従って地域の関係団体を加えて協議を進めた。地区懇談会の実施は、開かれた学校づくりの推進と併せて、学校・家庭・地域の連携をさらに強固なものにしていく絶好の機会となり得た。

また地域における体験的活動も、地区懇談会での協議を生かして、地域の有志、保護者の参加を求め、協業の体制で展開することによって生徒の存在感、使命感を高める効果を生み出した。

3　成果と今後への志向

研究というよりは実践を通しての学校づくりを目指したわけであるが、要は生徒の変容を期待することであり、結果として現在、授業や諸活動が活気ある展開を見せており、地域、保護者、生徒そして学校それぞれの納得の上に作られた校則もうまく機能している。また何よりも地域が学校を見る目を変えてきたことが挙げられる。

本研究を通して得たことは、教育の原点は生徒の主体性を育てることにあるということを確認したことであり、このことを今後の学校経営の第一の指針としていきたいと考えている。

平成６年度　各専門部活動計画

◪ 調　査　部

部長　古　橋　正　好（河・上河内中）

調査部は、前年に引き続き全日中教育情報部と共同して「中学校教育に関する調査」を平成６年６月に実施しました。調査内容は次のとおりです。

(1)　公立中学校の学校数・学級数・生徒数・教員数の増減状況に関する調査
(2)　平成６年度教育費（都道府県負担分）に関する調査
(3)　中学校の学級数別教員定数に関する調査
(4)　中学校教員の需給状況に関する調査
(5)　教員に対する都道府県教委の異動方針に関する調査
(6)〜(8)　教員の待遇、旅費、資質向上に関する調査
(9)　担当教科数・免許外教科担当状況に関する調査
(10)〜(11)　高校入試制度等、及び中学校の教育課程に関する調査
(12)　中学校の退職に関する調査
(13)　校長・教頭の選考制度等に関する調査
(14)〜(15)　中学校長の待遇、年齢別人数に関する調査
(16)　中学校に設置する特殊学級に関する調査
(17)　学校給食に関する調査
(18)〜(19)　寄宿舎、へき地の学校教育に関する調査
(20)　生徒指導対策費に関する調査

以上の調査実施に当たっては、県教委義務教育課人事係、行政係、同高校教育課、同保健体育課に資料提供を依頼いたしました。

なお、(9)担当教科数、免許外教科担当状況に関する調査　(イ)一人当たり担当教科数　(ロ)免許外教科担当　にあたっては、各地区調査部員の方々を通じて悉皆調査をお願いし、集計の上報告をいただきました。内容の詳細については、平成６年９月、全日中発行の「平成６年度中学校教育に関する調査」報告書を御参照ください。調査にご協力下さいました皆様に御礼を申し上げ報告といたします。

◪ 研　修　部

部長　間　宵　　博（宇・陽西中）

1　第１回研修会（６月20日）　　教育会館
(1)　平成６年度役員・組織
　部　長　間　宵　　博（宇・陽西中）
　副部長　豊　田　　實（塩・氏家中）
　副部長　渡　辺　紘　夫（小・乙女中）
(2)　今年度の研修活動計画の設定
　ア　主題　心豊かでたくましい日本人を育てる中学校教育（継続）
　イ　副主題　個性を生かす教育の推進と学校週五日制の実践的研究
　ウ　重点課題の研究の意義と視点
　エ　第16回県中学校長会研究大会の基本構想

2　第２回研修部会（７月18日）　県学校生協
(1)　第16回県中学校長会研究大会の企画
　ア　３地区発表・分科会・講演会
　イ　大会日程の細部計画と役割分担
(2)　研究収録17集の編集の基本計画の検討

3　第３回研修部会（８月18日）　　教育会館
(1)　第16回大会にかかわる諸準備
(2)　研究収録第17集の編集計画の策定

4　第16回県中学校長会研究大会
　県子ども総合科学館・平成６年９月８日
(1)　全体会　開会行事・研修課題・３地区発表
(2)　分科会　宇河・下都賀・南那須の３地区の研究発表に基づく研究協議
(3)　講演会
　演題　「個性を育て、自己実現を目指す進路指導」－学校経営と校長の役割－
　講師　千葉大学名誉教授　坂本　昇一先生

5　第４回研修部会（11月17日）　教育会館
(1)　研究大会の反省と研究収録17集の編集

6　第５回研修部会（12月15日）　教育会館
(1)　平成７年度研修内容の基本構想案の策定
　研究主題・副主題・重点課題と研究の視点

◇ 編　集　部

部長　千　本　文　雄（宇・泉が丘中）

平成６年度栃木県中学校長会報発行に当たっての編集部会の開催、会報内容の概要は次のとおりである。

1　編集部会　　会場はすべて教育会館

第１回　平成６年６月３日（金）

役員の決定、本年度の編集方針の協議、第81号の内容、執筆依頼者の協議等

第２回　平成６年11月25日（金）

第82号の内容、執筆依頼者の協議等

2　平成６年度の会報発行とその内容

(1)　会報の発行と発行日

年２回発行　（第81号・第82号）

第81号発行日　　平成６年９月１日

第82号発行日　　平成７年２月１日

(2)　各号の内容

〔第81号の内容〕

役員所感……横嶋会長のあいさつでは、中学校教育の当面する課題として、選択履修幅の拡大の問題、学校週５日制に伴う休業土曜日の授業の振り替えの問題、高校入学者選抜の問題の３点について言及している。専門部の活動計画、関東甲信越群馬大会報告、退任にあたって（前会長）、新任校長の一言、地区だより（河内、芳賀、塩谷、南那須、安佐、足利）、私の朝会訓話、お知らせ（関東都県算数・数学教育研究大会栃木大会、関東甲信越静統計教育研究栃木大会、全国修学旅行研究大会）、栃木県中学校文化連盟の発足と今後の活動の方向

〔第82号の内容〕

役員所感、全日中徳島大会報告、専門部活動報告、研究学校報告（２編）、地区だより（宇都宮、上都賀、栃木、小山、下都賀、那須）、海外視察報告

☆　執筆者をはじめ会員各位の御協力に感謝申し上げます。

◇ 職員対策部

部長　大　出　廣　志（宇・陽北中）

平成６年６月３日（金）に栃木県教育会館において専門部会を開催し、本年度の組織及び事業計画について協議し、事業として福利厚生部との共催で、主題「退職後の生活設計について」の研究会を実施することになり、計画通りその実施ができた。

なお、研修会の概要は次の通りである。

1．主　題　「退職後の生活設計について」

2．日　時　平成６年12月２日㈮　13:30〜15:30

3．会　場　宇都宮市東コミュニティセンター

4．参加者　全員約40名

5．研修内容及び講師

(1)　医療保険について

・退職後の医療

・任意継続組合員制度

・継続療養制度　等

県教委福利課資格係長　　葭田　昌

(2)　退職手当について

・退職手当の種類

・退職手当の計算

・各種課税

県教委福利課副主幹兼給付係長　望田　博

(3)　年金制度について

・年金の種類

・退職共済年金の内容と仕組み

・退職共済年金の支給　等

県教委福利課

副主幹兼年金貸付係長　小舘　守

(4)　退職者部会等について

・退職者部会制度

・互助年金制度の概要　等

県教委福利課福主幹兼経理係長　高久久雄

なお、これら四つの研修内容の講話に先だち、県教委の樋山勝也福利課長補佐からあいさつの中で全体的なご指導をいただき、講話後に参加者からの多数の質問と講師からの応答がありました。

◇ 進路対策部

部長　霜　見　徹　也（宇・星が丘中）

本年度は、昨年度からの課題を受け、①生徒の進路指導の進め方　②高校入試制度改善の在り方　③高校教育制度改善の在り方などを主な内容として研修活動を進めた。

1　第１回研修会

(1)　期日　６月30日（木）

(2)　場所　栃木県教育会館

(3)　内容　次に掲げる項目等について、アンケートを実施し、その結果をもとに検討した。

・中学校における適正な進路指導の在り方

・新しいタイプの学校や学科の導入

・普通科、職業学科、定時制、通信制等の在り方

・新しい専門学科設置の方向

・選抜方法の多様化等の在り方

・入試の実施方法、日程の等の在り方

・私立高の入学者選抜の在り方　　等

2　第２回研修会

(1)　期日　９月22日（木）

(2)　場所　栃木県教育会館

(3)　内容　県立高校の入試及び教育制度等の改善等について協議、要望等をした。

県立高校に関しては、本年度は全高校で１日体験学習を実施し、進学校選択に関する情報提供に努めたこと。昨年度大幅な改訂をしたことに鑑み、本年度は昨年度とほぼ同じ内容で入学者選抜を行うことなどを確認した。

3　第３回研修会

(1)　期日　11月21日（月）

(2)　場所　コンセーレ

(3)　内容　校長会と連携して私立高校連合会と入試の改善等について話合いを持った。

入試の時期、方法、高校の生徒指導の状況等が主な話題であった。昨年度から実施された調査書の統一については、評価が高かったが、更に観点別学習状況の記載も必要であるなどの意見もあり今後の課題である。

◇ 修学旅行部

部長　渡　邊　敏　夫（宇・豊郷中）

本年度は、関修委の地区大会開催地が本県の順番であり、３地区の研究大会も関東地区の担当とのことから両者を兼ねたかたちで全国修学旅行研大会を開催することが決定されていた。

本部会としてはこのことを踏まえ一昨年の秋から発表者を決め準備を進めて、校長会総会や同理事会等で協力方を願って来たことは周知のとおりである。

大会期日を昨年の10月28日と決定後本部会を３回開催するとともに全修協事務局との数回にわたる打合わせ会議をもち着々と準備を進めて当日を迎えたが、関東各県はもとより、東海、近畿地区からの絶大な参加協力を得て盛会裡に終了できたことは参加された校長会会員の先生方の記憶に新しいことと思う。

大会会長に本県会長の横嶋孝夫校長を頂き、文部省を始め、東海地区、近畿地区、関東５県の各県教委の後援を得て、発表者は市貝中の田上教諭及び豊郷中の古田教諭であったが、本県教委指導主事、水越先生の指導講評や閉会後の理事会での評判も栃木県への賞賛が相次で述べられこの大会が成功したことが評価されたことを報告するとともに関係各位への感謝の意を表するところである。

さて、前半は研究大会の件を述べてきたが本部会の活動としては、近畿修委の担当した全修協セミナー京都大会への参加や関修委としての専門委員会での研修会等での研究も行っていることも報告しておかねばならない事項である。

最後に平成８年度の修学旅行実施についての業者決定が本年度中にしなければならなくなった経緯について是非述べておく必要があると考えているが、結果的にはその原因はＪＲのリストラのためダイヤの作定をコンピューターシステムに切り替えその殆どを稼働させるにはデータが早期に必要で有り、データとしての人員数は業者が把握したものでなければならぬという訳である。本部会も数回にわたりＪＲと折衝をしたことを付記し、本部会報告を終るが、よろしくご協力願いたい。

◇ 福利厚生部

部長　橋　本　好　雄（宇・瑞穂野中）

平成６年度の福利厚生部の事業活動は、次のとおりであった。

１「生徒手帳」編集会議 平６．９．３ 尚徳会館・運動能力・体力診断テスト記録

- 体位の学年別平均値
- 県人口の動態
- 村、町の確認
- 格言集の見直し

上記のことについて会員が分担して作業に取り組んだ。

２「退職後の生活設計についての講話」

平６．12．２　宇・東コミュニティセンター

- 医療保険について
- 退職手当について
- 年金制度について
- 退職者部会等について
- その他

講師として県教委福利課から課長補佐をはじめ各係の代表の方々をお招きしてご講話をいただいた。（職員対策部と共済事業）

来春、定年を迎えられる多くの会員の参加があり盛会だった。

※　詳細については、職員対策部に一任

３「新しい道」「中学生の安全」編集会議

平７．２．４　教育会館

両テキストとも内容的にみて改訂したばかりなので、殆ど手直ししないで済んだ。

今年度を顧みると

前年度の反省から年次事業計画を全面的に見直して、年間の研修部会の開催回数を３回に削減することができた。

また、今後の課題として、本部会が手掛けた各事業についての問題点や要望事項等を多くの会員からお聴かせ頂ければ幸甚である。

◇ 生徒指導部

部長　中　里　三　男（宇・陽東中）

１　研究課題『登校拒否等学校不適応生徒への対応について』

生徒指導部は、この課題に迫るため「学校へ行きたくないという子を生まない居がいのある学校づくり」の展開を啓発し、実践例を全県的にとらえて各学校へ寄与していくこととした。

実践例から３点を載せる。

(1)　学校嫌いの一つとなりやすい差別や仲間外れを生まない学校づくりの実践例

生徒に人権を尊重する態度を育てる取り組みをした学校の例である。まず生徒の人権感覚を高めるためには教師の人権感覚を高めることが不可欠であるという考えから、学校教育のあらゆる場面（登校、朝の会、授業中、休み時間、給食、清掃、帰りの会、放課後、部活動）において教師が対応すべきことを明記した「人権感覚の鋭い教師を目指して」の手引きを作成し、全職員が同一姿勢で実施して研究主題に迫る成果をあげている。

(2)　学習に自信を失わせない取り組みの実践例

大半の学校が、どの子にもよくわかる楽しい授業の展開に努めている。とりわけ、「居がいのある学級とよくわかる授業の創造をめざして」に取り組んでいる学校の実践は、教師自らが「一人一人の生徒を生かす」という意識の変容を図る努力から出発している。

生徒の持ち味を生かした学級づくりによって存在感をより高めたり、個性に応じて学習へのやる気を高めるなどで、その成果をあげている。

(3)「いきいき栃木っ子　３あい運動」への取り組みの実践例

多くの学校が３あい運動を、学習活動をはじめ生徒会活動、学校行事等で展開している。

生徒会活動が消極的だった学校の実践では、「自主自立そして自治・一人一人が主人公」を掲げて生徒のアイデアを生かした諸行事を展開し、一人一人が主役となって活動をする喜びを感得させ生き生きとした学校生活を実現させている。

地区だより

なごやかなうちにも充実した研修の推進

宇都宮地区

新会員５名を迎え、４月６日の第１回研修会から今年度の研修活動がスタートした。

今年度の主な研修活動

○　第46回関東甲信越地区中学校長会研究協議会群馬大会分科会提案

大出（陽北中校長）研修部長を中心にたび重なる研修を行い、それをもとに第４分科会『生きる力を育てる進路指導』のテーマを受け、「自主性・社会性の育成を基盤とした進路指導の在り方」について瑞穂野中学校長橋本先生が提案した。すばらしい内容で多くの参加者に深い感銘を与えるとともに、校長として進路指導の進め方について理解を深め合うことができた。

○　宇河地区中・高校長連絡会議（年２回）

宇河地区中学校長31名、高等学校11名の参加を得て研究協議が行われた。特に、「偏差値にたよらない進路指導の在り方」「推薦入学の在り方」「観点別学習状況の評価の取り扱い」等々について中学校、高等学校それぞれの立場から熱心に協議がなされた。

○　文化財廻り

本会伝統の行事で、研修の一環として本市教育委員会文化課指導主事神野安伸先生を講師に招いて実施した。まず、飛山城跡発掘現場を見学した後、宇都宮氏にゆかりのある笠間市内の文化財を見学した。主な見学先は、岩谷寺木造薬師如来坐像並びに木造薬師如来立像、楞厳寺山門並びに木造十一面千手観音立像（以上すべて国指定重要文化財）等で普段個人では見学できないすばらしい文化財に接し、見聞を広め、資質の向上に努めることができた。

この他多くの研修活動を行ったが、いつもなごやかな雰囲気の中にも熱意あふれる充実した研修が実施され、みのり多い１年であった。

本年度の研修活動の概要

上都賀地区

本地区は春山英雄校長（北犬飼中）を中心に、32名の会員で研修を推進している。平成６年度は９名の新会員を迎え研修に活気が出て来た。

１　研修主題

研修主題は前年度の「いきいきとした、活力にみちた教育活動の推進」の趣旨を生かし「新しい学力観に立つ教育活動の推進」とした。

２　研修の方針

研修は次の運営方針をもとに進めた。

(1)　会員相互の自覚と連帯意識を高め本会の一層の充実を図る。

(2)　具体的な研究資料や実践資料を持参し研修の充実を図る。

３　研修実践

全体定例研修会は年３回。県外研修１回。研修部会年３回。定例研修会は３分科会（１分科会10～11名）に分かれて研修し、全体会で各分科会での研修結果を発表し合った。

４　分科会における研修の視点

分科会は次の５視点で研修が進められた。

(1)　体験的な活動を重視し、生徒の興味・関心を生かす教育活動の推進。

(2)　新たな視点に立つ教育活動推進のための現職教育

(3)　心豊かで主体的・創造的に生きる生徒の育成

(4)　新しい学力観を生かし、いきいきと活動する学校体制の確立

(5)　地域に根差した特色ある教育活動の実践

５　研修の結果

生徒自らが主体的に活動を展開する中で、生きる力となる意欲・思考力・判断力・表現力・創造力等を育成する研究がなされた。課題として、新しい学力観に立つ授業の改善、体験活動を重視した学習活動と基礎・基本とのかかわり、評価による指導過程の改善等、今後も研修を続けなければならない課題が多い。

研修活動の概要

栃木地区

本市校長会は小学校15校、中学校7校の22校で構成され、共通テーマ「生涯学習の移行に即した学校教育はどのようにしたらよいか」に沿って小中学校別に研究に取り組んだ。

中学校部会では、サブテーマ――社会の変化に主体的に対応できる心豊かな人間の育成を目指して――を設定し、研修の具体的内容も次のように提示した。

1　学校教育目標・学校経営等の見直し
2　教育計画の改善
3　新しい学力観に立った各教科、道徳・特別活動等の学習指導の改善
4　学校と家庭や地域社会との連携・協力の改善

本年度はまとめの最終年度に当たり、各校の実践内容や校長としてのビジョンを持ち寄って協議し、幅広い領域から研究を進めた。その成果は小中合同会議で発表され、「研修のあしあと」にまとめている。

また、小中合同研修会では、次の共通課題を分担し、それぞれの学校や地域の実態を踏まえた研究発表がなされた。

1　生命尊重の教育の重視
2　教職員の人権感覚の醸成
3　学校図書館の充実と活用

一方、県外教育調査では浦和市立常盤中、盛岡市立下橋中を訪問して選択教科履修幅の拡大やチームティーチングの在り方などについて研修した。

学習指導要領の趣旨を踏まえた教育活動を展開するには、小中連携のもとに互いに実情を理解し合い、幅広い研修を通して視野を拡大することが求められる。

このような研修結果を生かして各校独自の学校経営が創造されるものと考えると、本研修会の持つ意義は大きいものと言える。

地区だより

小山地区

小山市校長会の中学校長部会は、石川光男会長を中心にして11校の校長で組織し、年間10回の定例研修会を持っている。

本年度の市校長会の研究主題は『豊かな心をもち、たくましく生きる児童生徒の育成を目指す学校経営』であり、それを受けて中学校部会は、「個性を生かす教育を進める学校経営」を研究テーマにして、サブテーマは「各教科における個性を生かす教育の展開をいかにすべきか」に設定して研修してきた。12月にまとめられた研修記録は市教育委員会を招いた研修会で発表し、各校に配布されている。

また、定例の研修会の中では、その時々の当面する諸問題について活発な意見交換を行い、市中学校としての統一した態度を決めている。さらに年に一度は広く各界から講師を招聘して講演会を開き校長としての識見を高めている。

本市校長会の特色の一つは、退職された先輩校長との絆を大切にしていることである。三月で退職され第二の人生を歩み出されたばかりの先輩校長先生とは、一泊の旅行を通して旧交を温めながら、やがて行く道への貴重なお話を伺っているが、これには教育委員会からも参加をいただいているので、バスの車中や酒酌み交わしながらの楽しい交流の場は、腹蔵ない意見が飛び交い有意義な会となっている。

県外研修も積極的に取り入れていて、全日中の総会に参加するときは、日程の一部にその年の研究テーマに沿った研究をしている都内の中学校訪問を入れ、先進校としての充実した研究成果を吸収するのが恒例となっている。また、例年九月には二泊の研修を実施しているが、本年は長崎平戸方面を選び、長崎中学の選択履修幅の拡大を中心にした研究を視察した。校長が寝食を共にし異なる地域の自然や歴史・文化に触れて見聞を深める旅は、日頃の悩みを語り合うのにも良い旅である。

研修活動の状況

下都賀地区

下都賀郡校長会は、南部4町11校と北部4町5校から成り、各々の町の特色が学校経営の中に顕著に窺える。平成6年度は本会のためにご尽力くださった先輩の方々が退会され、4名の校長が入れ替わり、藤一中植竹校長を会長に新組織づくりがなされ発足している。県専門部（8部門）の各担当者は主体的に研修に携わり、資料収集、研究内容等を行い、全体で検討会をもつようにしている。この事業計画の概要は次の4点である。

(1)　研究テーマに基づく研修
(2)　学校経営に関する情報交換及び連絡・調整
(3)　各種研究会への参加
(4)　県外教育事情調査及びその他の調査

今「情報化、高齢化、国際化等の急激な社会の変化は学校教育に多大の影響を与えている。生徒一人ひとりの個性を十分生かし、自ら学ぶ意欲をもち、社会の変化に主体的に対応できる心豊かでたくましい生徒を育てる中学校教育の一層の推進を図ることが我々に求められている。これらの学校経営の大きな視点を踏まえ、年間事業計画の内容について各校順次に会場校とし研修に努めている。計画以外に会場校の特色ある学校経営の在り方が直接目や身で把握できることはお互いに自校の学校経営に大変参考になる。

研修内容では、全日中校長会の活動の重点の中の「創意ある教育課程の編成と個性を生かす教育」「当面する教育課題の解決」については具体的な研修が多方面からなされ、資料提供、熱のこもった情報交換もあり有意義であった。さらに、本年度は昨年度の大平中の「新しい学力観に立った学習指導に引き継ぎ県教委指定研究校岩舟中の「同和教育」及び藤岡一中の「性に関する指導」の発表等は生徒の主体的活動が重視され、しかも、斬新的内容であり、下都賀郡の学校は勿論広く他市町校へもいろいろな示唆を与え、今後大いに役立っていくものと思う。

学校5日制（月2回休み）への対応

那須地区

本年度最初の那須地区中学校長研修会は、平成6年4月7日（木）に5名の新会員を迎えて開催された。まず最初に新しい組織づくりが行なわれ会長に若草中学校の青柳　擧校長が選出された。そして、本年度の研修テーマや研修内容が討議され、次のように決定した。

心豊かでたくましい日本人を育成する中学校教育
～創意ある教育課程の編成と個を生かす教育～

研修の視点として

- 創意ある教育課程の編成（学校週5日制に対応する学校運営等を考慮して）
- 個性を生かす教育（個性のとらえ方、新しい学力観に基づく指導法や評価のあり方）
- 望ましい進路指導のための指導体制

6月14日には、小中合同の研修会がもたれ、それぞれに分かれて研修を深めた。特に来年度から、月2回の（土曜日）休日に対応した教育課程をどうするか、時間を超えて熱心な討議が、なされ、各学校の取組みが具体化した。

また、進路指導部会の提案を基に、昨年度は、学区の見直しや業者テストの廃止等で話題沸騰、大いに揉めたが、今年はその反省に立って、公正な評価をもとにして的確な進路指導が実施されることであろう。

そして、恒例となった夏休みの先輩校長先生方との懇親会が、8月11日の夕方より、ホテル・ニュー塩原に於いて開催され、先輩方の人生観やその後の近況などを拝聴し、懇親を深めあった。

海外研修視察記

オセアニアの教育と自然を満喫

河内町立田原中学校
校長　手　塚　　操

1　はじめに

平成6年度文部省教員海外派遣の一員として海外教育事情視察の機会を与えていただいた。

10月3日から18日までの16日間、オーストラリア、ニュージランドの訪問を終え、無事帰国する事ができた。

その間、オーストラリアのバーンズデール市とニュージランドのタウランガ市において両市の教育委員会と小・中・高等学校の訪問、さらに教育文化施設を視察し、両国の文化と自然を十分に味わうことができた。

宇都宮市がニュージランドのマヌカウ市と姉妹都市を結んでいる関係で私は、10年前に宇都宮市内の中学校からサッカーチームを編成し、監督として引率をしたことがある。10日間に渡り、サッカーの親善試合、学校訪問、観光などを通してニュージーランドの自然と国民性に感動し、今回再びオセアニアコースを選んだ。

2　両国の概要

両国政府ともに英連邦内の立憲国である。

オーストラリアは、日本国の約20倍の面積に約1,650万の人口と六つの州から成り立っている。なかでも、私たちが訪問した東部地区のビクトリア州に人口が集中している。

連邦政府が外交、貿易、移民などに関する権限をもつのに対し、州政府は、教育、産業、環境問題などの権限をもっている。オーストラリアは、世界各国から集まった多民族国家であり著しい在野精神に満ちていると言われている。

ニュージランドは、日本の本州とほぼ同じ面積に約350万の人口と南北二つの島から成り立っている。国民性が実直、誠実、他人に対する親切心など日本人と性格が共通している。

3　両国の教育課題

連邦制をとる両国とも、政府が教育に対する財政援助を行っているが、教育活動については州政府の管轄するところとなっている。

学校教育に関しては、オーストラリアが2年前から、ニュージーランドは6年前から始まった教育改革に取り組んでいる。

マオリ伝統の大歓迎　タウランガ中学校で

オーストラリアは、「School of the Future」、ニュージランドは、「Tommorow School」と呼ばれる「未来の教育」の教育改革に向けて取り組んでいる。両国の教育改革はほぼ共通しており、その内容は次のようなものである。

(1)　教育の権限を州政府から学校への大幅委譲
(2)　学校経営、教育内容については、父母、地域、生徒の発言権の強化。
(3)　教育予算の削減に伴う行政組織のスリム化と教員定数の大幅削減、学校の統廃合の実施
(4)　障害児をいわゆる普通の学校で学習する総合教育の推進
(5)　カリキュラム改革による学力の向上。

上記の教育改革を図るために各学校には、学校理事会（ニュージランドでは合同委員会）が設けられている。学校理事会の構成メンバーは父母、教師、地域住民、生徒それぞれの代表、並びに州教育委員会の担当者と学校長である。

理事会の内容は、人事、給与、施設管理、予算執行、カリキュラム作成、校則、など全てのことが決定されている。これは、これまでの州政府の関与を減らし、学校長に権限と責任が課たせられたことが大きな改革である。私たちが訪問した6人の校長先生方からも学校経営と教育に対する情熱と校長としてのリーダーシップを感じ取ることができた。

最後に今回の教育視察を通して、両国教育の実態や両国が日本に対し強い親近感をいだいていることが理解でき、さらに、恵まれた自然を満喫できたことは、すばらしい研修であった。